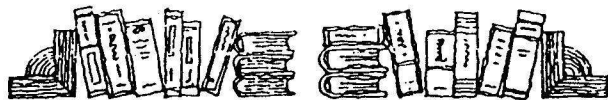


国語国文学会だより



No. 7

1992. 7

国文科卒業生の会

春の総会・研究発表会報告

平成四年度春の総会・研究発表会が、五月二十九日（木）、香雪館四〇一番教室において開催されました。

開会の辞

国語国文学会会長挨拶 阿蘇瑞枝先生

第一部 総会 午後一時三十分

- (1) 国語国文学会委員長および役員紹介（在学生の会・卒業生の会）

- (2) 平成三年度活動報告・会計報告

- (3) 平成四年度活動計画・予算案

(2)(3)については在学生・卒業生よりそれぞれ報告・説明があり、各案件とも審議・承認されました。なお今年度の活動計画は、従来の活動に加え、加入の少ない近年の卒業生を対象に勧誘を行い、会員の増加、学会活動のいっそうの活性化をはかることを重点目標としております。

- (4) 自主ゼミ紹介・報告

(5) 奨学金授与

久松潜一奨学金 二名

上村悦子奨学金 二名

中島斌雄奨学金 一名

第二部 研究発表会

- (1) 「こころ」試論―「明治の精神」をめぐって―

大学院博士課程前期一年次 川嶋葉子氏

- (2) 形容詞・形容動詞の動詞化についての一考察

―「春子はきれいだ」と「秋子はきれいにしている」・美人はどちらか?―

大学院博士課程後期一年次 中北美千子氏

どちらも卒業論文・修士論文を發展させた密度の濃い発表で、活発な質疑応答が行われました。

秋季大会報告

平成三年度秋季大会・講演会が、昨年十一月三十日（土）に開催されました。白石美鈴氏、中島悦子氏による研究発表、阿蘇瑞枝先生の「万葉の女性たち」と題した講演、作家の永井路子氏の講演―「私と古典―『平家物語』を読む」（次号で紹介）―が行われ、大盛況でした。

引き続き、生協食堂ウィミンにおいて懇親会が行われました。研究室の諸先生、卒業生、在学生、総勢八十九名という、前回は大きく上回る参加者がありました。先生方や、講師の永井路子氏のスピーチをうかがい、熱気にみちた楽しいひと時でした。

背の山は、和歌山県伊都郡の紀の川沿いにある山で、大和から紀伊国に出かける時に通る道筋に当たりました。紀の川を挟んで背の山に向い合つている山を妹山と呼んで夫婦になぞらえ、旅人は興じたり旅愁を新たにしたりもしたようです。亡き夫を恋ひ慕いつつ一年余りを過ごしてきた皇女の、背の山に対面した時の気持ちがよくあらわれている歌のように思われます。

和銅三年(七一〇)、皇女はすでに即位していましたが、藤原宮から奈良に都を遷す時に詠んだと伝えられる歌もあります。

飛ぶ鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ

都遷りによって、夫の眠る

まじしものを
大津皇子と石川郎女が詠み
交わした歌です。二人が逢う
約束をした場所で待っていた
のに、石川郎女は来ず、いた
ずらに山の木々からしたたり
落ちる雪に濡れてしまつた
と大津皇子は訴えています。
それに対して、石川郎女は、
皇子を濡らした山の雪に私は
なりたかつた、と答えています。
大津皇子の訴えをはぐら
かしたようなところもある歌
ですが、見方をかえれば、愛
し愛されている者の持つ自信
と余裕が感じられる歌です。
やがて二人が結ばれることは
仕える陰陽師によって露に
された時に詠んだ大津皇子の
歌によってわかるのですが、
宮廷の陰陽師によって秘密が

に贈った歌も文字通りに解することではできません。これもやはり、身近な若い男性に親愛の情をあらわすのに、ややもおおげさな愛情表現を試みたというか。実は、私は、このでしようか。実は、私は、このでしうか。実は、私は、このでしうか。

石川郎女が、田主や宿奈麻呂の父である大伴安麻呂の妻となつて、大伴坂上郎女と橘公を生んだ石川郎女と同一人と考えていますので、彼女にとつて田主と宿奈麻呂は義理の息子に当たることになりました。義理の息子たちにこんな歌を贈った石川郎女は、なかなかウィットに富んだ女性であつたように思われます。

五百重娘

藤原鎌足の娘の一人、五百重娘は、姉の水上娘と共に天

万葉の女性たち



国文学科教授

阿蘇瑞枝

真弓丘のあたりを見やること
すら出来なくなる寂しさが、
奈良に向かう途中の天皇の心
をふとおそつたものと思われ
ます。

これほどに亡き夫を偲び続

と思われまゝ。この山辺皇女も、蘇我赤兄の娘常陸娘が天智天皇の後宮に入つて生んだみ子で、石川氏の流れに立つ女性の一人でした。

らしめし雪の碎けしそこに
散りけむ

「私の住む里に大雪が降つた。あなたの住む大原の古びた里に降るのは、この後だるうよ」というのが、天武天皇

あつたとは思われません。夫と死別あるいは生別の後、夫に操を立てることなく、自由に生き生きと自分の人生をやり直している女性が多い事実をこの詔の背景に透かし見ることができるように思われます。

万葉集には、草壁皇子が亡くなった翌年、阿閉皇女の紀伊国に旅した時の歌があります。

これやこの大和にしてはあが恋ふる紀路にありとふ名に負ふ背の山

子の生前に夫婦間で詠み交わした歌は伝わっていません。同居している夫婦であれば、ことさら愛の歌を詠み交わす必要もないわけで、贈答した歌がないことによつて二人の間の愛情の多少をはかることはできません。

けれども、万葉に伝えられる草壁皇子の唯一の歌が、妻の阿閉皇女ではない、他の女性に対する愛を誓つた歌であることは、いささか皮肉な感じがいたします。

大名児を彼方野辺に刈る草

皇・文武天皇・元明天皇・元正天皇といった天皇たちも、この氏の女性たちが生んだみ子たちでした。

草壁皇子に愛された石川郎女も、この氏族の女性の一人です。ところで、この石川郎女は実は、草壁皇子の異母弟にあたる大津皇子の愛人でもありました。

あしひきの山のしづくに妹待つと我立ち濡れぬ山のしづくに

我を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくになら

正妻でもなく、大津皇子の求愛に応じただけの受け身の愛であつたかも知れませんか、誰も責めることはできないののですが、大津皇子も草壁皇子も亡くなつた後、大伴田主や宿奈麻呂へ恋心を抱いた女性として万葉集に登場します。

みやびをと我は聞けるをや
ど貸さず我を帰せりおその
みやびを

みやびをに我はありけりや
ど貸さず帰しし我そみやび
をにはある

石川郎女が大伴田主と贈答

はそれに対して、少し真面目過ぎたように思われます。

なお、この石川郎女は、田主の弟の宿奈麻呂にも歌を贈っています。

古りにし姫にしてやかくばかり窓に沈まむ手董のごと
「すっかり古びたお婆さんであるながら、こんなに窓に落ちんだりするものでしょうか。まるで幼い子供のように分別もなくなつてしまつて」という意味の歌です。

田主との贈答歌を先のように考えますと、この宿奈麻呂

良の明日香村の小原といつて
いるところで、藤原鎌足誕生
の地と伝えられます。天武王
皇のお住いである淨御原宮か
ら一キロと離れていないほど
のところ、しかも、大原の方
が山に近い高台です。天武
天皇の歌は、大雪というのも
大げさなら、僅か一キロた
らずの距離しかないところを、
古びた里と言ったり、こちら
に降った雪がそちらに降るの
はこの後だろう、と言ったり
して、五百重娘をからかつて
いることがわかります。

の政治力が十二分に発揮できたと言つてよいと思います。

もし三千代が三野王と別れることなく、不比等との間に光明子を生むこともなかったなら、藤原氏のこの後の運命は大きく違つていたのではないかと思われまゝす。

一夫多妻の時代で、一人の男子に複数の妻が何人もの子を儲け、それによつて政界に大きな影響力を持つことができたこの時代の女性たちの方が、果たした役割の大きさを改めて思つた次第でした。

日本女子大学国語国文学会・卒業生の会

平成3年度決算報告

平成4年度予算案

【収入の部】

【収入の部】

科 目	予 算	決 算	摘 要	増 減
前年度繰越金	758,440	758,440		-
3年度収入	600,000	736,727		136,727
会費	500,000	442,000		△58,000
懇親会費	100,000	219,000		119,000
「国文目白」誌代・送料	-	1,260		1,260
寄付	-	60,000		60,000
利子	-	14,467		14,467
合 計	1,358,440	1,495,167		136,727

科 目	金 額
前年度繰越金	817,908
4年度収入（会費）	500,000
合 計	1,317,908

【支出の部】

【支出の部】

総会費	725,000	677,259		47,741
通信費	200,000	82,575	切手、はがき代	117,425
文具代	20,000	13,570	ノート、ファイル他	6,430
コピー代	10,000	1,190	会議用コピー他	8,810
名簿整理費	20,000	24,600	住所確認往復はがき	△4,600
会報印刷費	200,000	118,874		81,126
委員会会合費	15,000	6,190		8,810
ゼミ費	60,000	60,000		0
懇親会費用	100,000	219,000		△119,000
発会準備金返済費	100,000	100,000	第2回分	0
「国文目白」誌代・送料	-	1,260	研究室へ	1,260
講演会費	-	50,000		50,000
予備費	633,440	0		
次年度繰越金	-	817,908		
合 計	1,358,440	1,495,167		

総会費	705,000
通信費	200,000
文具代	20,000
コピー代	10,000
名簿整理費	20,000
会報印刷費	200,000
委員会会合費	15,000
ゼミ費	60,000
講演会費	50,000
新会員へのPR費	30,000
発会準備金返済費	100,000
予備費	612,908
合 計	1,317,908

上記の通り決算報告致します。

会計 猶場 三保子 田中 基子 保志 美也

監査の結果、上記決算報告が正確であることを認めます。

監査 萩原 昭子

研究室だより

○日本語学御担当の奥津敬一郎先生が、一九九二年三月をもって御退任になられました。

○かわって四月から、石綿敏雄先生をお迎えしております。石綿先生の御専門は、日本語構文論・言語機械処理・外来語研究。幅広い御活躍で、すでに多くの学生たちに慕われていらっしゃいます。

○昨年度一年間海外研修でヨーロッパへ行かれた源五郎先生は、元氣にお帰りになりました。御専門の演劇に関してはもちろんのこと、滞在中のエピソードなど豊富なお土産話は、教室でも、新鮮な感動を与えてくださっています。

○その他、引き続き国文科を御指導くださる先生方は次のとおりです。阿蘇瑞枝先生（上代文学）、後藤祥子先生（中世文学）、麻原美子先生（中世文学）、浅野三平先生（近世文学）、熊坂敦子先生（近代文学）、倉田宏子先生（近代文学）、佐久間まゆみ先生（日本語学）、清水康行先生（日本語学）、谷中信一先生（中国文学）。なお助手は、白石美鈴氏、中嶋千佳子氏、植田恭代の三名と、非常勤の松沼敦子氏です。以上のスタッフで、今年もにぎやかにスタート致しました。（研究室・植田記）

企画係よりのお知らせ

☆平成4年度 研究サークル

○平安文学談話会（平安文学の諸問題の研究発表） 高野春代 三三七〇―六八〇六

○皇女研究会（皇女総覧 平安朝編の作成） 柳沢理恵子 〇四五―八四一―六五二五

○古代中世文化論（「風姿花伝」等の中世芸術論） 三九七―二四八四三

○中島斌雄先生の俳句を詠みながら 綾野道江 〇四四―九六六―五四二五

○卒業生の文学活動の跡をたどる―国文学科卒業生を中心に（創刊当時の「青路」・らいてうを支えた同窓生） 齊藤令子 三七八一―六三八〇

○農学研究会（本年度休会）
参加ご希望の方は、各サークル代表者に随時電話でお申し込み下さい。

☆秋季大会の研究発表を希望の方は、題目・氏名・回生・電話番号を明記の上八百字以内の要旨を添えて八月末日までに、葉書にて

〒112 文京区目白台二一八一―日本女子大学国文学科研究室内 国語国文学会・卒業生の会大会係
まで、お申し込み下さい。

一九九二年七月十五日
発行・日本女子大学国語国文学会
卒業生の会